香西松聲著「和文階梯」（翻刻と解説）

――明治十五年に松江中学校で使用された和文教科書――

田中瑩一

凡例

本書は島根県出雲市、市立出雲図書館所蔵、福山亀太郎筆録本である。縦十五センチメートル、横十・五センチメートル、各面に十三行の罫と、柱に「松江書林川岡版」の文字を赤く印刷した和紙を三十三丁こよりで袋とじにしている。記入はすべて毛筆。第一丁を表紙とし、表に

中学書生」福山亀太郎」明治十五年九月廿六日」雲陽香西松聲先生著」和文階梯」（」は改行箇所を示す。）（写真1）

と記している。本文は第二丁表から第十二丁表まで続けて書かれている（途中、第十一丁裏に落書きあり）が、そこで教科書としての「和文階梯」が完結しているのかどうかはわからない。第九丁裏以下には、傍注、頭注、読点などが加えられており、当時の授業内容の一端をうかがうことができる。第十二丁裏から第三十丁裏までは無記入、第三十一丁表から第三十三丁表までは係結びのまとめ、その証歌、語釈、続いて松聲作と思われる和歌などが書き込まれている。これらは教科書としての「和文階梯」の体系のうちには含まれないと考えられるが、当時の文法学習や和歌教材の一端を知る資料と考えられるので、あわせて翻刻した。第三十三丁裏は無記入である。

解説にも記すように、明治十五年当時、著者香西松聲は松江中学校授業補助、筆録者福山亀太郎は松江中学校第一科（和漢学科）の生徒であった。松聲は自作の文章をも加えて「和文階梯」を編し生徒に書きとらせ、それに注釈を加える等の形で授業をすすめたものであろう、ここに翻刻するのはその際に福山亀太郎が筆記したと考えられるノートである。

「桜いとす、ろう咲（〝白う咲〟の意）」（2オ＝第二丁表のこと、以下同様）とか、「ゑひし、ゝむ（〝酔ひ進む〟の意）」（9オ）など方言音にひかれたと思われる表記、「風に一声の秋ありといふ句、詩の句」（3オ）とか、「日かけもやかけう、ろひ」（6オ）など衍字や脱字、「えもいはすお、かしう」（6オ）とか、「昼のよ、うに」（9オ）など仮名遣いの誤り、その他不用意な筆録部分が散見されるところをみると、本書は聞き書きによってか、あるいは視写としても忽忽のうちに書きとられたものであろうと推測される。

出雲図書館には他に同じく福山亀太郎書写の「松聲文集」が蔵され

ている。「和文階梯」と同じ大きさの、青罫十行の和紙七丁袋とじのノートに毛筆で書写されている。第一丁を表紙とし、表に

松江中学書生」福山亀太郎」明治十五年十二月十五日」松聲文集」　（写真3）

とあり、第二丁表冒頭二行に

松聲文集」雲陽　松江香西癡述」

と記し、第三行目から本文がはじまっている（写真4）。本文は第七丁表まで書かれ、第七丁裏は無記入である。「和文階梯」所収の松聲作の文章を選んで清書したものと考えられる。「松聲文集」の筆録は「和文階梯」のそれにくらべて文字もていねいで、前記のような不適切な表記もほとんど正され、「和文階梯」では改行されていなかった引用歌の表記も改行して整えられている。

本翻刻では「和文階梯」所収の文章のうち「松聲文集」にも再録されている文章（本翻刻番号一、二、三、七、八、十一の六篇）については両者を対校して示すこととした。その場合、「和文階梯」を底本とし「松聲文集」で相違する箇所を右の（　）内に小字で示し、両本で対応する文字の欠ける箇所はそれぞれ・で示した。たとえば本翻刻で、

朝附日うらゝかにさし出る頃ほひある・御社にまゐてたるに（2オ）

とあるところは「和文階梯」では

朝附日うらゝかにさし出る頃ほひある御社にまゐてたるに

とあり、「松聲文集」では

朝附日うららかにさし出る頃ほひ何々の御社にまゐてたるに

とあることをあらわしている。

「和文階梯」にあるふりがなや傍注は（　）のない小字であらわし、頭注その他翻刻文にあらわしえなかったことがらは翻刻文末尾にまとめて注記した。丁移りは』で示し（　）内に表紙を含めて数えた丁番号を記した。□は判読不能部分、文題上部の漢数字は私に付した通し番号である。

翻刻

一　（春の日何々の産土の御社に詣る詞）

天つみ空殊にのどやかに打かすみ朝附日うらゝかにさし出る頃ほひある・御社にまゐてたるにまつ神門打くゝり宮居ふしをろかみひたりよりみきりのかたにめくりをへさて幣殿の邊を徘徊るさるにおほひろ前のみむなみの玉垣の際に桜いとすろう咲出又青柳の薄みとりして御手洗川に影ををつせるなとあかぬさまなるに折しも鶯』（2オ）のこゑたかく聞えたるはえもいひかたきけはひになむ

二　山家時鳥をきくといふことを

卯月のはしめつかたある山里を過くるに賤か垣根に咲出たる卯花はさなから雪のふりかゝれるがごとし折へし夕日影山端にすつまむとするにほとゝぎすの二こゑ三こゑ啼出たるは時にとりてめつらかにこそ

三　松下泉といふことを

なつの日もやゝかけろひかたになりぬおもふとちふたり三たりともなひて岡』（2ウ）の松かけなる清水くまはやとて割子さゝひなととり

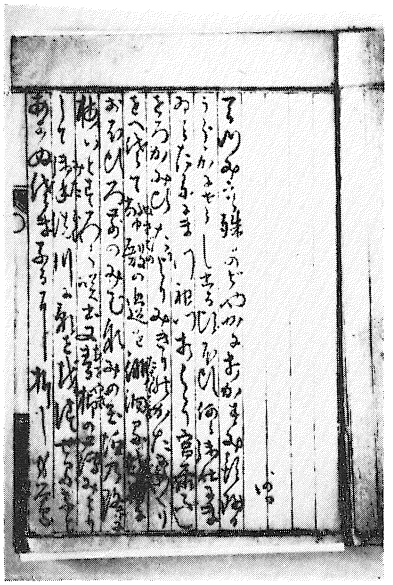

写真　2
「和文階梯」第二丁

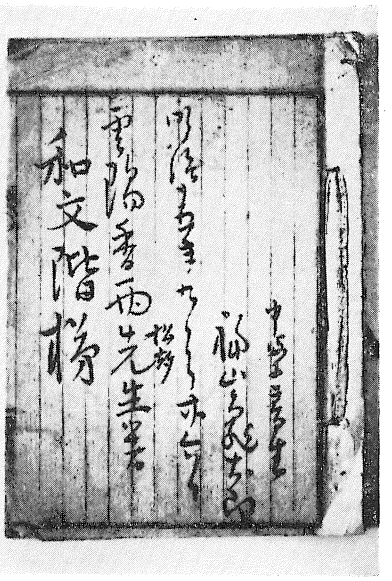

写真　1
「和文階梯」第一丁

写真　4
「松聲文集」第二丁

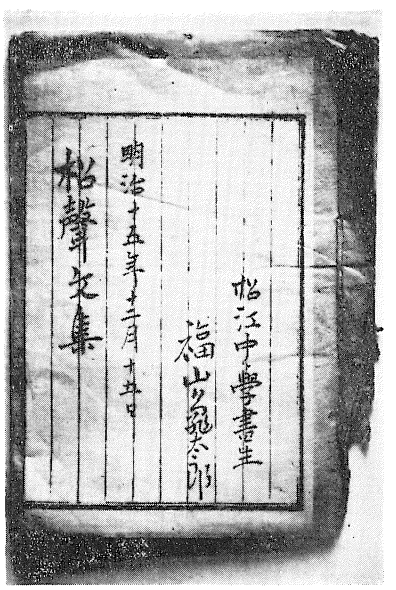

写真　3
「松聲文集」第一丁

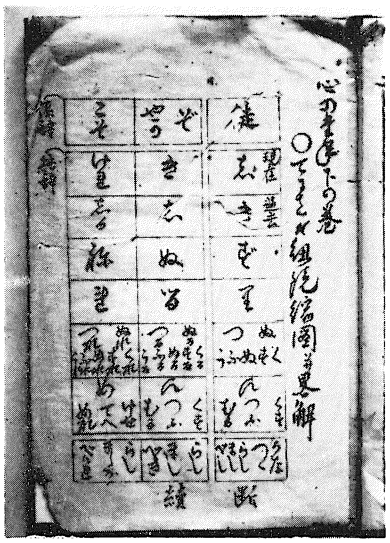

写真　6
「こころのたね」下　　第二丁

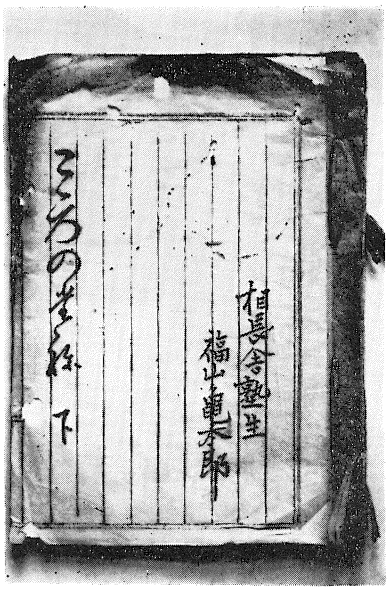

写真　5
「こころのたね」下　　第一丁

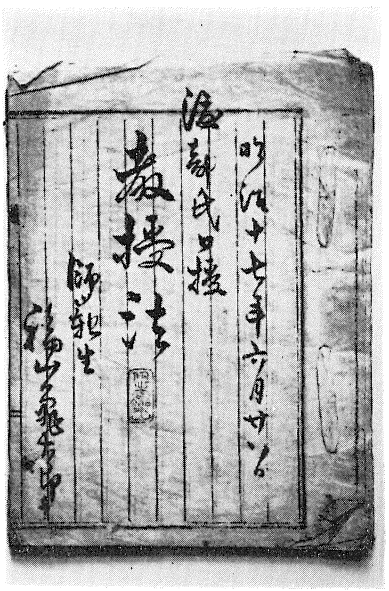

写真　8
「教授法」第一丁

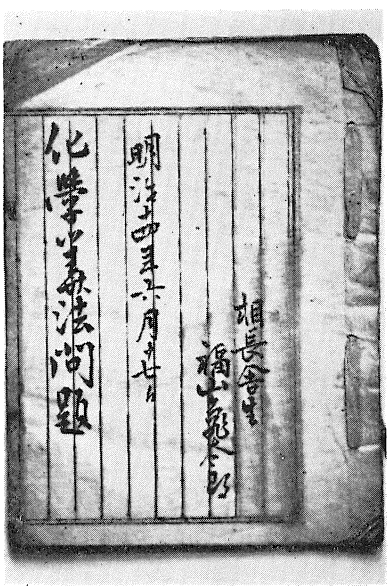

写真　7
「化学算法問題」第一丁

もちてうかれ出ぬさてかの出水のもとにものしてかたみに水むす(ひ)・てのむにひるのあつさはいつち行けむとまておもほゆるに夕風のさと吹来たるにかの松高して風に一聲の秋ありといふ句・詩の句さへすんし出られておの〳〵うたひ(へ)ふらきあひぬさていつの間にか月の山端高(たか)・くすみ昇(のぼ)・りたるはわれらがかへさをおくらむ(ん)とにやあらむいとおかし

四　松梢文集帰雁消雲といふ題にて

ころは二月の廿日はかりある人に契りしことありてその人かり許ゆかむとてたち』(3オ)いつるに有明の月の影残りてえもいはすおもしろきにすぐ〳〵とも行やらむを門田の雁も今はとてかへるにやあらむきれ〳〵に鳴たちしがやかて雲井にたかくきこえければ

〳〵かへる雁聲の行方もかすみけり

朧月夜の村雲の空〳〵

と打すしつゝこゝろさしの所にゆきてしか〴〵のよしをいひてなほ花の頃ならはいかにいみしからむといへはあるしいなとよ春のあはれはこの頃にかきり侍るなり花の咲ぬればちらむことのまつ思ひやられて中々おもひのかすまさりぬべし』(3ウ)されば在五中将のたへてさくらの世の中にたへてさくらのなかりせは春の心はのとけからまし とよまれし物をなと何くれとものかたりするにはや山きはに紫たちたる雲の白くなり行けしきまたいはむかたなし

五　松聲初雪の詞

霜月のはしめつかたよひよりさえ〴〵しあらしの暁かたよりしか静まりて今朝しも山端しろうふりそめぬるは。紀の大人の木間(うしこのま)より花と見るまでとよまれけむ心はへもいみしかりきとふとすんし出られていとおかしまたかの琴の上にちりまかひたることなとおもへばさな』(4オ)からこゝろなき身もすゝろなりかしさてこそかゝる興をもそひけめとはしとみによりかゝりてさむさをもわすれてなむあはれこゝろあひたる友もかなめつらしき一ふしも聞まほしきを

六　松壷文集雲間鶴といふ題にて

三月やよひのころうすくもりたる空(1)のとかになかめらるるに鶴の鳴わたるころはたとしへなくいみしくなむわかよわひも千代にあえなむことをおもふにつけてこゝろさへその鳴行かたにひかるゝこゝちすかくて雲間にきら〳〵しく朝日』(4ウ)のにほへるかたになきゆくはかしこけれと日の若宮に千世かるにやあらむとさへおもはれて天なる川を行水のいさきよき聲〳〵は玉ちはふ神も神つとひにつとひましてきゝはやし給らむかし

七　松聲文集鵜川といふ題にて

さみたれの余波(なごり)の雲いたうとちはてたる空はいと〳〵くらきに夕やみの頃ほひ河の上つ瀬下つ瀬にたきつらねたる火かげはかの鵜飼が伴(ざ)の舟にしあるらしまことや世にありふる身は』(5オ)いつれかゝらさるへきとひ(2)とりこたれてなかめをるにをりふしほとゝぎすのひとこゑ名のり出たるはいとめつらかにおほえられて

ほとゝきすうしとうれしと鳴らめど

ひとつこゝろのなぐさまれ筒

とすんし出れは(られて)・なむさるをやう〳〵かのほかけもうすらきて河上す

こしあからみたるは月の出来るにやあらむ

月前[3]』（5ウ）

八　松聲・文夏の日ふじきみ山にのほるといふ題にて

みな月のあつさたへかたき日かけもや・かけうろひかたになりぬいてやとてちかきわたりのおもふとちひとりふたりさそひてふしきみのたけにとてものすのほり来るほとはおのも〳〵あへきてくるしみけるが嶺にいたりつきては松の下風いとすすしくなむ。かくてまつみやしろにまうておろかみまつりをへてかたへの木陰におりゐわらはにもたせたるわりこさゝひなととりてゝかたみにのみとをうるほしき。あはれこゝより見わたし』（6オ）たるさまを一哥つゝよみ出・らむはいと興あらむといひいたしてやかてひとりがよめる（ちとせふる松江の海・を見わたせは波・のひとりもときはなり鳧・）と何んのふしもなくうたひ出たるにかたはらなるわらはかさらばまろもうたてうものをよみ侍りてむとてやかて（いと高・くのほりけらしなとほしろく雲井につゝく四方の山なみ）とうるはしきこゑしてうたひ出たるはしめのよりははるかに波もたちまさりて聞かればおのれはさらなり今ひとりのをのこも口こもりてよますなりにけり』（6ウ）

九　桜の詞

ついちところ〳〵くつれて花の木末とをもしろく見入らるゝ所ありと狭衣にいひけむやとのさまをいかでとしころ心にかゝりしにおもほえすものにゆくたよりにみれはさる所ありて露の間よりこほれいてたる花の匂ひえもいはすおかしうなむやをらいりてみれはしとみのかたへにおほふはかりの袖もて口すさひたるはあるしなるへしをさ〳〵花をといはまほしきにさと吹出たる風にちりかふはあたらしうこそ

十　又桜の詞

高砂の尾上ならねと遠方のみねにほの〳〵』（7オ）にほへる雲はまつこひしさくらになむ外山のかすみとよまれし匡房中納言のことの葉をもひいてられてうちまもらるゝにうすらきゆくけしきはかのいとはるゝものこゝちおほふなりけり心のこめかたくてたとる〳〵はる〳〵とそのみねにのほればいと廣き所にていみしう盛なる陰にをみなとものあまたうたけしてありけりしひてそのむしろにともなひて盃さしつゝをかしきものかたりすゑひのすゝむまゝにいとめつらかなる心ちしてかの万葉集の竹取翁かことさへおもひ出てられむもあくよなうお』（7ウ）ほゆるほとにいつとなくかの風流女ともの見えすなりぬるは花の霊や化して出たりけむとうちかたりけるをりしも女のわらはは しり来て何かしの君より御さうそこ参りとおとろかしたるに夢さめたれは文机のうへにかの中納言のさくらの哥のみなんありし

十一　水無月・晦・かた飫宇の海に舟をうかへてあそふといふことを　松・聲・

ひるのほとはあつさいとたへかたかりけるに夕さりつかたより風吹いてゝすゝしけれは例のふたりみたりいさなひておうの海にすゝまんとおほはしのもとにいたりぬさるに』（8オ）かのはし のへわたる歩行人かあのといとしけきは大城のもとのみさかえもしるくそありけるさてやかて艤してこき出るにけしきよしおきへにそひえし大神の山は水

無月の空なから雪いとしろうふりかゝりて塩しりのやうになむあるとかけりしそのかみのさまもうかひておかしまたへつかたより人とよみきこえてこれも舟屋かたものし妓女ともに三弦ひかしめつゝみ打はやさせわかうとらはゑひしれうたひかなて来る也・けりかなたこなた行ちかふるをりしも波路をわたる』（8ウ）風のすさひにすたれまきあけたるまゝにおみなのきぬにたきしめたるうつり香のさとかをり来たるもゆかしう中にも殊に花やかなるこゑして・いつかたに鳴て行くらむ時鳥とうたひたる・やゝ舟のうちもしつまりぬかのさうかは壬生ぬしの濱のわたりのとよまれしなりけりとその世のこと何くれと打かたらひて興をましさかつきのかすもかさなりゑひしゝむほとなくよになりていよゝすゝしきに空すみわたり見る〳〵舟もこきへたゝりてかなたなるもりの木陰ともしひ昼のようにてものう』（9オ）るこゑはるかに聞ゆこれなん天満宮の御祭礼にこそかしこにこきよせてんやと、かいとるをのこのいふに、おの・〳〵そのあらましなりければ、いさみたち、とふがことくに、御社のもとにつきて、まつ廣前にいたり、ふしをろかみまつり、瑞籬より枝たれし老木の松のもとに、しはしいこひ、やをらうなる子のさゝけし、水茎のあと見はやとて、かしこゝゆきめくり、あなよくものせるかな、なとほめのゝしり、おもほ・す、時うちれりけり、いてや舟にのらんとて、もとこしきしに、いたるに、ひむかしの、山端すこしあからみたるは、廿四日の月の出来るにやあらん、』（9ウ）

十二　子規の詞

月いみしうおかしき頃こよひはかならすとおもふおりしもひとこゑほのめかして過ゆきしはあかすくちおしうなむかの実定卿のたゝ有明のとよまれけるもかゝるさまにやありけむかし

十三　納涼のこと葉

あつき日も、からうして、くれゆくまゝに、何かしの局のわたりのそゝろゆかしくて、涼みかてらに、ものしけり、せむさへの草木の雨をまつ様してまちえかほなるに、夕立けしきはかりそゝきて、なごりの風にはら〳〵と、露のこほるゝさま、いとおかし、はしにいてゝ、すゝしのきぬの袖くちすゝしけ』（10オ）に、かいやりて、御まへには、いつこにかわたらせ給らむ、いみしきゆふけしきに侍るをかゝるをり、あまり奥まりておはしまさむは、つきなきことなり、うちとけすかたにて、こそ、くらしかたきあつさは、わすれもしけれ、あなひとほの御けしきやと、ひとりこちたるは、今まゐりの、夕顔といふ女のわらはなるべし、かの、ぐゑんじの、物語に名のり出たる、何かしの姫君の、こゝちせられて、あさましく、見さしてこそ、帰りしか、猶すゝしきかたへは、忘れかたくて、

十四　葵の詞

みあれの日、かもの御社にまうてたれは、さきおふ』（10ウ）こゑきこえくる、まに〳〵、やかてをとろ〳〵しく、御使のわたり給ふさま、いとめてたし、朝日ににほへるかゝふりのみとりは、あふひ草になん、そも〳〵文化三とせといふとし、の、三月に行幸さへありけるは、御代の名の似かよひたるもたふとくなむ、

いてましのめくみの露は神山の
　時にあふひやうれしかりける
といはるゝも、例れいのきこゑすやあらむ、ものよくしれらむ人、さためて、よかし
○□の臨時の御祭の絶たるをつかせたまひことし文久△』（11オ）

』（11ウ）

十五　月前のほとゝきすの心を

村さめ(13)雨の、なこり涼しく、雲はれて、月いとおもしろう、すみわたりたるに、今宵(今夜なり)は、かならすほとときすなきぬべしと、おもふこゝろのうらますして、うら〳〵しう、ほのめき出たるこゑ(与たり心に合ふなり美なり興の深きなり)の、めつらしくきこゆるは、軒(14)のたちはなの、香に催されてにやと、なつかしうなむ、』（12オ）

（12ウ～30ウまで無記入）

ハモ徒　クスツヌフムユルリキシ
ソノヤ何　クスツヌムルキシ
コソ　ケセテネヘメル
夏草に夕ゆる野邊の螢こそおくしら露と見えまかひけれ
露ハ粒水ト云フ｢ナリユトハ湯ナレモ上古ハユハ水ヲ云フ其粒ノ如キ水ト云フ
夕立　ユガ、クタル、ト云フ｢ナリ、ユハ水ナリ、クタチハ下ルト云フ｢ナリ　夜ノフケル｢ヲ夜クタチ」ト云フ
筆、フミヲカク手ト云フ｢ナリ
スゞリ、スミヲスルト云フ｢ナリ
茎、ミツクキ、ト云フ｢ナリ墨ヲフクマスル茎ト云フ｢ナリ

又一説ニ猶ホ水ノ流ルヽ如ク来クルヲ云フナリ』（31オ）
夜頃経て待兼山の時鳥さのみ初音を徒ノ格□何忍ふらむ』
ことしよりあらたまるへき聲すなり大内山の峯のまつかせ
　□時の哥
時めきしまりのひみつもくろたれのかたひにぬるむ秋は来にけり
　峯ののの松風まつかせつつ
　松聲　秋　水　』（31ウ）
とふかりのかげさへさむし山河の水のこゝろも秋にやあらん
　人のもとへ遣しける文の奥に
月のよひ雪のあしたに琴とれはことに君こそ恋しかりけれ
　納　涼
河骨の露に宿かる月見れはかけなき夜半もすゝしかりけり
　月前夜宿
露しもに身をしもたくへてりわたる月のかつらのかけに到らむ
　稲　妻
いなつまの照る影しるしなつの』（32オ）早田かるへき時ちかみかも
　夜　落　梅
うめのはなさかりやいたく過ぬらんかせなき夜半もちりにこそちれ
　或山間にやとりて
寝覚する軒の筧のさら〳〵にうき世の夢は残らさりけり
大空にそひえし山をまくらにて雲の衾に寝たる夜半かな
　花
吉野山かすみなからに白雪の降にしはかり花はさきけり
から人のうらやむといふ日の本の』（32ウ）花のさかりに成にけるかな

盛　花

さくら花手折ていなむ高砂のをのへの雲と見む人の為め

月前荻といふ題にて

』[15]（33オ）

注

(1) 頭注に「長閑」とある。
(2) 「和文階梯」では「飛とりこた禮帝」の右に「ひとりこたれて」と文字使いを変えて記している。「松聲文集」は前者のみ。
(3) 本翻刻番号十五の文題を書こうとしたものかと思われる。
(4)(5) 「松聲文集」では歌を改行し二行書きとしている。
(6) 「和文階梯」では「こきよせてん」の次に「子規の詞　月いみしうおかし」（本翻刻番号十二の冒頭）の二行を記し抹消している。
(7) 頭注に「こよひは今ん夜といふことにてよひはよをのべたる詞なり」とある。
(8) 「もひとこ」の右に注記があるが判読できない。
(9) 頭注に「頻なり」とある。
(10) 「やかて」の右に注記があるが判読できない。
(11) 頭注に「愛したいといふ心なり」とある。
(12) 第十一丁裏には「村雨の」等、漢字及びかなの手習いのあとがある。
(13) 頭注に「一村降る雨又そのけしき」とある。
(14) 頭注に「時鳥橘を好む」とある。
(15) 以下七行分に計算の落書きがある。

解　説

一、和文教科書としての「和文階梯」の特色について

明治十四年七月、文部省は中学校教則大綱を制定し、国語に関する教科としてはじめて「和漢文」科を設けた。松江中学校がこの教則大綱にもとづいて全体の教則を改正したのは明治十六年十二月のことであるが、[1]授業内容についてはそれ以前から新教則にのっとるように移行措置がとられた。当時松江中学校の教員（授業補助）であった西田千太郎の日記に次のような記述がある。[2]

「十月十八日ヨリ、中学二科生ハ文部省所定ノ教科ヲ修ムルコトトナル」（明治十四年。六ページ）

「十八日　中学二科生ハ本日ヨリ文部省布達ノ教育令ニ基イテノ授業始マル」（明治十四年十月。二十二ページ）

西田日記の記述は第二科（英学科）についてのものであるが、第一科（和漢学科）についてもおそらく同様な措置がとられたであろう。後にも述べるように香西松聲が松江中学校の教員として採用されたのは明治十五年八月であった。その年、彼が自編の教科書「和文階梯」を用いて展開した授業は旧制度の「国語」ではなく、新制度の「和漢文」に相当する科目であったと考えられる。

明治十四年以前の松江中学校第一科における国語に関する教科ならびに教科書は、明治十一年八月制定の松江中学規則によると次の通りであった。[3]

下等一級＝国語　「心の種」

上等三級＝国語　「詞ノ八衢」
上等二級＝国語　「詞瓊綸」

これをもってみれば明治十四年以前の松江中学校の国語教育は古典文法の教授を中心としていたことが知られる。（他に文章学として各学年に「文章軌範」「八大家文読本」などの漢文範文集と設題作文とを課している。）

ちなみに、右松江中学規則にあげられている三種の教科書のうち、「詞ノ八衢」（本居春庭著）及び「詞瓊綸」（「詞の玉の緒」本居宣長著）の二書は、当時全国の中学校で広く国語教科書として採用されていたものであるが、それらの教科書に進む前段階として「心の種」（「詠歌心の種」萩原廣道著）の学習を置いていた点が松江中学校の国語教育の特色である。出雲図書館所蔵の福山亀太郎のノートの中には、同書下の巻の冒頭「てにをは紐鏡縮図并略解」の章のほぼ全文を筆録したものが残されている（写真5）。この章は本居宣長の「てにをは紐鏡」に一部修正を加えながら簡略化して解説を加えたものであって、すすんで「詞の玉の緒」の学習に至る入門教材として適切である。又、この書の下の巻には続いて「合辞俗譯」「詞の八衢四種活の図并略解」などの章がある。前者は宣長の「古今集遠鏡」の例にならって「けり」「たり」などいわゆる助動詞類を「俗言（さとびことば）」に訳して解説した章であり、後者は春庭の「詞の八衢」に一部修正を加えながら簡略化して解説した章である。福山亀太郎のノートにはこれらについての筆録は見当らないけれども、松江中学校ではおそらくは「心の種」のうち右三章に国語入門教材としての意義を認めたのであろうと推測され、これはすぐれた着想であったということができる。

一方明治十六年改定の教則では、中学校教則大綱に従って「和漢文」科の中を「読書」と「作文」とに分け、和文に関する授業としては第一年、第二年の「読書」の項に「日本文法」を、第三年、第四年の「読書」の項に「和文」を、第五年の「作文」の項に「和文」を課している。教科書としては中根淑著「日本文典」及び稲垣千頴・松岡太愿編「改正本朝文範」を指定している。[4] これをもってみれば明治十六年当時の松江中学校の国語科では、まず古典文法を授け、その上に立って和文の読解を、さらにすすんで和文による作文を教授していたことが知られる。これはたとえば明治十五年五月、大阪中学校制定の「各学科授業の要旨」などにみられる和文教育の考え方と軌を一にするものである。同「要旨」には次のようにある。[5]

「読書ノ要ハ読法ヲ正クシ、意義ヲ詳ニシ、兼テ作文ニ資スルニアリ」

「和文ハ先ヅ文字、言語、文章、音韻ノ諸論ヲ教ヘ、次ニ雅馴ノ文章ヲ授ケテ、其例格ヲ考究セシムベシ」

即ち和文教育を、文法指導→読解指導→作文指導の三段階を含むいとなみとしてとらえているのである。

福山亀太郎らが香西松聲から「和文階梯」による授業をうけたのは松江中学校の国語教育が、旧規則「国語」における古典文法教授時代から新規則「和漢文」における和文教育時代へ移って行く過渡期であった。福山亀太郎らの松江中学校卒業年次（明治十六年八月＝後述）から逆算すると、彼らはこの時、旧制度の「国語」において「心の種」（下等一級）及び「詞ノ八衢」（上等三級）の二書を習い終えていた筈である。即ち和文教育の課程で言えば「文法」の段階を一応終え、「読解→作文」の段階にすすまねばならない時であった。香西松聲の

教科書「和文階梯」はその段階の教育に有効に機能することが期待されていたと考えられる。

当時比較的広く用いられていた中学校用和文教科書には、前述した「改正本朝文範」の旧版である「本朝文範」（明治十四年刊）の他、稲垣千頴編「和文読本」（明治十五年刊）、藤田維正・高橋富兄編「国文軌範」（明治十六年刊）などがある。これらのうち「本朝文範」や「国文軌範」はその序文で和文を書くための範文集であることを強調し、宣長、真淵、成章など、国学者の文章を中心に編集している。[6] 一方「和文読本」はその序文で編集意図を「初学の誦読の為に物したる」と述べ、本格的雅文の読みに至る一階梯として、軍記物語、歴史物語、説話などの文章を選んで編集したと説明している。このように、当時の中学校用和文教科書には主として作文の指導資料となることを目ざしたものと、主として読みの指導資料となることを目ざしたものとがあった。これら諸本にくらべて「和文階梯」はどのような特色を持っていたのであろうか。

香西松聲が「和文階梯」の出典として拠ったのは「松壺文集」（千家尊澄著）、「松梢文集」（著者不明）、それに自作の「松聲文集」である。「松壺文集」の著者千家尊澄は香西松聲が師事した（後述）千家尊孫の弟で尊孫とともに千家俊信に学んだ国学者であり歌人でもあった。「松壺文集」は未見であるが下房俊一氏のご教示によれば跋文に次のようにある由である。

「この御巻はわか松壺御殿のものしたまひたる文集の三部の編にてくれ竹のめてたきふみおほかる中よりわきてをかしとおほゆるをおのかしゝ文かくしをりにもとこひきこえてこたひぬきいてたるにな

（傍点引用者）

む」

即ち「和文階梯」の典拠となった「松壺文集」は和文作文のための範文集たることを期待して編せられたものであり、そこには前述の「本朝文範」や「国文軌範」の編集意図と相通ずるものが含まれていたということができる。又、福山亀太郎ノートの「松聲文集」に収められている文章は「春の日何々の産土の御社に詣る詞」「山家時鳥をきくといふことを」「松下泉といふことを」「鵜川といふ題にて」「夏の日ふじきみ山にのぼるといふ題にて」「水無月の晦日かた飫宇の海に舟をうかへてあそふといふことを」の六篇であるが、これらに共通の特色はすべてが紀行文であるということであり、そうして、「何々の産土」とか「何々の御社」のように代置可能な表現部分を設けていること、「ふじきみ山（松江市郊外の山の名、今の嵩山（だけさん））」への登山とか「飫宇の海（宍道湖の古称）」での舟あそびのように当時の中学生の生活経験に親しい素材をそろえていることなどをみると、これらが作文のための範文として用意されたものであることは明らかである。

当時の中学生にとって友人と連れだって山野を逍遙したり、祭礼を尋ねたりすることは絶好の楽しみであった。西田千太郎の中学生時代の日記に次のような記述がある。

「十八日　枕木山ニ登ル。観楓ノ節ニハ稍々遅シト雖モ是日ヤ天気晴朗ニシテ風景絶佳。同行六人。恩田、松崎ノ二氏、沢野塾生三人及ビ余。」（明治十二年十一月。十一ページ）

「二五日　八幡村ノ八幡宮ノ正遷宮ナルヲ以テ（日曜日ナルヲ以テ）之ニ詣ル。熱閙譬フルニ物ナシ。同行十人。林、本庄、坂本、成瀬、志立、板倉、楢崎、余及ビ三増苗雅、桑谷浅一郎。」（明治十三年四月。

十三ページ）

香西松聲は生徒たちが自らのこのような生活場面に取材し、それを雅文で記述することができるようになることを期待し、そのための範文を「和文階梯」の中に加えたものと思われる。

一方「和文階梯」が読みの指導資料としても用いられたことは語釈等に関する行間の書き込みによっても知られるし、何よりも、採られている文章自体に、狭衣物語、竹取物語、万葉集など古典からの引用や引き歌が多いことなどをはじめ、読みの指導内容を豊富に持っていることによって明らかである。

以上見て来たように、香西松聲著「和文階梯」は当時のわが国の中学校における国語教育思潮を敏感に反映し、「読法ヲ正クシ、意義ヲ詳ニシ、兼ネテ作文ニ資スル」ために、読みの指導資料となるとともに同時に作文のための範文集ともなることを意図して編集されたものであったということができる。そうして、地域的、生活的な素材を盛り込むことによって、和文の読解や作文を単に机上のものとして止めることなく、当時の中学生に、生活経験に取材した作文活動をすゝめようとしていた点に特色を見ることができるのである。

二、著者、香西松聲について

西田千太郎日記の明治十五年八月十九日の条に次のような記述がある。

「松江中学授業補助ヲ拝命ス、月給六円。

是日、香西藤右ヱ門（六円）及本庄太一郎（五円）ノ二氏亦タ中学教員ト成ル。

雨森先生死去。」（二十四ページ）

松江中学校の教員には他に香西姓が見当らないのでおそらくここに記されている香西藤右ヱ門が松聲その人であろうと考えられる。

島根大学庶務課に残されている「明治十六年　職員履歴書綴　島根県師範第一中学校」の中に明治十七年十月十一日付香西藤右ヱ門自筆履歴書がある。次にその全文をかかげる。

履歴書

嶋根縣出雲國嶋根郡黒田村
廿六番邸士族
香西藤右ヱ門
当五十四年三ケ月

現職島根縣師範學校兼第一中學校雇月俸金七円

一　証書所持不仕候

學　業

一　天保六未年ヨリ亡父貞蔵ニ従事同号十三寅年ヨリ能儀郡安来町医生阪本春隆ニ従事漢書ヲ読ム

一　同号六未年ヨリ国造千家尊孫宿禰ニ従事皇學并和哥ヲ習フ同号七申年ヨリ神門郡杵築社官和田瑞穂ニ従事手跡ヲ學フ

一　同号十五年辰年ヨリ亡祖父孫八郎亡父貞蔵ニ従事小笠原流諸礼ヲ學フ

職　業

一　文久二戌五月廿三日飯石郡掛合取締役被申付

一　明治三年年學館出役同号同年修道館訓導試補故實引受被申付

一　同号同年十月學校中得業生命セラル

一　同号十三辰年十二月松江女子師範學校訓導補命セラル
一　同号十五年松江師範學校兼松江中學校授業補助命セラル

賞　罰

一　明治十六年十二月廿四日職務勉勵候ニ付島根縣廳ヨリ留慰労金
　　弐円被下之
一　罰更ニ無御座候
右之通相違無之候也

明治十七年十月十一日　　香西藤右ヱ門㊞

これによると香西藤右ヱ門は天保元年（一八三〇年）生れ、漢学、国学修業ののち、文久二年三十二歳で官吏となったがのち教育界に転進し明治三年（四十歳）以降学校の教壇に立つようになった。明治十五年八月十九日松江中学校授業補助として採用されたのは五十二歳の時である。前節で見たように彼は着任後直ちに自ら和文教授のための教科書を編し生徒に筆録させて授業にあたった。生徒福山亀太郎がノートを調整したのは同年九月二十六日である。明治十六年以降も「和文階梯」が教科書として用いられたかどうかは明らかでない。

明治十八年に島根県師範学校兼島根県第一中学校（松江中学校改称）雇となった堀宗太郎（安政三年生）は明治十九年一月二十一日付自筆履歴書（島根大学蔵、前掲綴所収）に次のように記している。

「文久三年二月ヨリ出雲國島根郡外中原町高木文四郎ニ就キ四書ヲ讀ミ明治二年八月ヨリ同年十二月マテ満五ケ月間佛國人アレキサンドルニ就キ綴字書及佛蘭西文典ヲ學ビ明治六年五月ヨリ明治十八年八月マテ満十二年四ケ月間出雲國島根郡黒田村香西藤右衛門ニ就キ國學ヲ修業」　（傍点引用者）

これによると香西藤右ヱ門は修道館に勤務していたころから黒田村の自宅で国学を教えており、師範学校や中学校の教師時代にもそれは続いていたことが知られる。

三、筆録者、福山亀太郎について

福山亀太郎は本籍地、出雲市稲岡町一一八番地（旧地名、島根県神門郡川跡村大字稲岡一二番屋敷）で慶応三年（一八六七年）三月四日、父傳一郎、母トミの長男として生まれた。幼時から秀才として近在に知られた由、今も現地で伝承されている。

松江中学校入学以前のことを知る手がかりは今のところない。前述したように出雲図書館所蔵の福山亀太郎のノートに「こゝろのたね下」と題するものがある（写真5・6）。「和文階梯」と同形で本文六丁、日付はなく「相長舎塾生　福山亀太郎」と署名されている。相長舎は慶応二年内村友輔（鱸香）が松江西茶町に開いた漢学塾である。内村友輔は江戸昌平黌で漢学研究ののち松江藩藩校修道館で漢学を講じ、明治九年松江教員伝習校に変則中学科が開設されると中学授業兼教員伝習校教師となった。福山亀太郎が松江中学校に在学した頃には内村友輔は松江中学三等教諭となっていた（島根大学蔵前掲履歴書綴所収内村友輔自筆履歴書による）が家塾相長舎の経営は平行して続けられていた。松江中学校教員でありながらあわせて家塾をも開いていたのは前述の香西藤右ヱ門の他、沢野修輔や尾原惣八の場合も同じであった。当時の中学生たちの多くは課外にそれらの私塾へも通っていた。福山亀太郎と同年で松江中学第二科に学んだ岸清一の伝記は次のように伝えている。

香西松聲著「和文階梯」（翻刻と解説）　（田中）

「岸先生は中学校に於て、英語を以て各科の教授を受くる傍ら碩儒内村友輔翁に就て漢学を学び、毎朝早く起きて、同翁の塾へ通った。」

（「岸清一傳」昭和十四年、岸同門会刊。二十八ページ）

福山亀太郎も又同様に松江中学校に在籍しながら課外に相長舎に通ったということは十分考えられる。しかし相長舎は漢学塾であって、そこで「心の種」が講じられたとは考えにくい。「心の種」は先にも述べたように松江中学第一科下等一級の国語の教科書であった。相長舎は寄宿舎を持っていたので、福山亀太郎はあるいは相長舎に寄宿してそこで漢学を学ぶかたわら松江中学に通ったのかも知れない。出雲図書館所蔵の福山亀太郎ノートには他に明治十四年六月十七日の日付のある「化学算法問題」（写真7）及び「化学試験法簿」がある。明治十一年八月制定の松江中学規則によると「化学」は下等二級、下等一級及び上等二級に配されている。福山亀太郎の松江中学卒業年次（明治十六年八月）から逆算すると、これら明治十四年六月のノートは下等二級の「化学」の授業に際して記入されたものと推測されるが、そのいずれにも表紙に「相長舎塾生」と記されている。

明治十六年八月、福山亀太郎は松江中学校第一科を卒業、ひき続いて松江師範学校高等科に進学した。この年の松江中学校第一科の卒業生は七名であったが、その内福山亀太郎を含めて四名が松江師範学校に進学している。出雲図書館には福山亀太郎の師範学校時代のノートも残されている。当時の松江師範学校一等助教諭渡部寛一郎が口授した「教授法」（写真8）及び「教育学」の二冊である。「和文階梯」[7]と同形で前者は本文十九丁、後者は本文三十丁、どちらにも明治十七年六月廿八日の日付がある。松江師範学校では足立鍬太郎[8]らと同期であった。

明治十七年、福山亀太郎は松江師範学校高等科を卒業、郷里へ帰って荻杼（おぎとち）小学校訓導となりやがて校長となった。のち上京して東京帝国大学に入学、鉱山工学を専攻した。明治三十五年、東京生れの渋谷きくと結婚したが子どもがなく、明治四十二年、末弟正市を養子として入籍した。仙台鉱山監督局長在職中の大正六年四月、立太子記念として、郷里、川跡小学校に石造の門柱を寄贈した。川跡小学校は近年鳶巣小学校と合併し校地を移したが門柱は今も同校跡地に残っている。寄贈者名には妻きくの名もあわせ彫られている。昭和八年刊の「島根師範学校同窓会会員名簿」の福山亀太郎の欄には「東京市芝区南町五三、行政裁判所評定官」とある。昭和二十年三月十日、東京大空襲の折に火傷を負い、それがもとで同年六月十四日に死亡した。七十八歳であった。墓は郷里にある。

注

(1) 「松江北高等学校百年史」（松江北高等学校百年史編集委員会編、昭和五十一年同校刊）の記述による（八十七ページ）。

(2) 引用は「西田千太郎日記」（昭和五十一年島根郷土資料刊行会刊）による。以下本論文における西田千太郎日記からの引用はこの書による。

(3) 国立公文書館蔵「島根県史料十八」所収「中学教則増補伺別冊」による。

(4) 「松江北高等学校百年史」（九十～九十七ページ）所引「県立師範学校規則全」（国立公文書館蔵）による。

(5) 引用は「続・教科書から見た明治初期の言語・文字の教育」（国語シリーズ No.50、古田東朔担当、昭和三十七年光風出版刊）による（六十ページ）。

(6) この事実は注(5)の書にも指摘されている（六十四ページ）。ただし同書

では「和文読本」も同様であるとしている。

(7) 渡部寛一郎は明治十五年八月、松江師範学校二等助教諭から師範学科取調員を命ぜられて東京師範に留学、一年後帰松して同校一等助教諭となり、上京中に学んで来た教育学を祖述した。

(8) 足立鍬太郎はのち東京高等師範学校を卒業し、明治二十八年から三十一年まで松江中学校で国語を教えた。のち静岡県に転じて豆陽中学を主宰した。「小学校用島根県地誌史談」（後藤蔵四郎と共著）「松江櫂歌考解」「南豆俚謡考」等の著書がある。第四期国定国語読本の編者井上赳は鍬太郎の二男である。

付記　所蔵資料の翻刻を許された出雲図書館ご当局ならびに解説を草するに当って種々ご教示をたまわった曽田文雄、下房俊一、佐野節郎、鎌田泰次郎その他の諸氏に感謝いたします。

（一九七八年七月二日）